通商司為替會社規則

414
A1030

通商司為替會社規則

第壹條

一 今般通商司為替會社を建設し諸國為替金融通自在を図り商業無利子にて富國の基礎を為建

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

御趣意ニ付當會社より貸出し候
金子返納方出願ニ於ては府當金
可申付仮令官家民家ヶ関係ある事
有之ハ其節御因循なる事無之可有之万一
猶明あき行向ニ於ては府引受出願可
申事

但為替會社ニ而替為替金貸附金ハ
而扱商社會社ニ而貴品ニ為替之ハ
会社ニ相合之同心協力いたし為果
出営ハ商社事体の而扱いたし事

第二ヶ條

一 通商司ハ為替會社貸附并為替元備金
として若干金貴府より出ヶ渡シ可

有之事

第三ヶ條

通商司為替会社取扱之儀ハ会社中
一紗分限ハ應〻金高ニ付并
為替之値〻差加可申利足之儀ハ日一分
ヶ割合を以請取之可申事

第四ヶ條

一社外ニ者ハ社中〻預り金致ス儀ハ
勝手ニ致ス儀ハ〻利足ヶ之儀ハ前日相ヶ
割合を以可渡可申事
但預ヶ年月の儀ハ当人ヶ為勝手ニ

第五ヶ條

一 差加金并預り金為替手形の義は當月名前を記し差出申 社中身元金の外より自分入用に當何時なりとも手形引替金を差戻申 尤預り日数三ヶ月内乃定めを以ハ勝手無利足右日數以上ハ日々利分を渡申事

第六ヶ條

一 通高同為替会社高社内調べ差ハ五ヶ日勘合ひく事無之ものは家に付一家ごと如何ハ賭合実効を彼は帳面に記し毎月両会社乃諸帳面ハ社中の者ハ勿論両会社然る為調べを互に通言可見改乃権ある毎日事

第七ヶ條

一 差加金額り金の替手形水害流失難出
ゆえ紛失致ふつく早速元書写を
届出る事 届日限より三ヶ年過ぎ
ふ出ふつく元金差戻ふ為額り金形書改ふ
ヶ成 当人随意ゆえ不可の儀事

第八ヶ條

一 差加金額り手形表裏破ふ可為随意
也何様ゆえ様中破損前以申出聞届
の上ゆえ様書替可申事

第九ヶ條

一 貸附金の義ゆえ引当證授出ゆえ額ゆえ

時價の半價より六七分價を限り評
の上荒人或人而之賃渡中自海を渡
当由求り出ス及歩み為替金書社中出
候紀事

第十ヶ條

一 商社中賃渡の義ハ品に寄引當品
無之共類品並組合役々連印を以中出候
為替賃渡中（義事）

第十壱ヶ條

一 遠國に旅人當所へ持越引當
品借用中出分ハ当所に責務人に求ル
汐ハ賃附可中事

第十二ヶ條

一 貸附金利足之義ハ日一歩五厘の割合
を以月々請取之義ハ勿論借主財を以
取極の事 偏通例三ヶ月限り之事 ヶ月
分より已六ヶ月を越へ候ハ可引當不之義ハ勿論
市場にて何品にを限らず商売相立て
公平の入札を以売捌品重ハ借主へ
市渡ふ足金ハ借主より償ふの事
但勿論中引當不代價指出し下落之時
あ之場借主より差入金を以補ふ事
且引當品売捌入札の勿論ある事
ふ之事

第十三ヶ條

一 通商司為替会社組合之義ハ十人ツヽ

月番ヨリ三ヶ月ツヽ持切月番中ハ出ス
金ニ成ハ返濟ヲ以テ其月番撰リ之事
但月番ヲ外ニ弐人ツヽ順ヲ以テ横濱表其外
會社ヲ見廻ル事

第十四ヶ條

一通商司為替會社ヘ加ル中度中出ス人
社中一同評議ヲ以テ元ノ通加ル事

第十五ヶ條

一遠國ノ者ハ同様ニ志ヲ抱キ
國ノ府藩縣添役指揮ヲ受ル事

一於諸國通商司為替會社等ヲ立ル中度ハ
必ス東京大坂ノ局ニ差図ヲ受ケ別
紙ヲ以テ願ヒ申ス事

第十六ヶ條

一 新貨幣造製造乃上新古ニ正金引替方乃義ハ通ニ為同為替会社ニ
おいて取扱ヒ事

第十七ヶ條

一 世上融通ニ為銀二百七分五厘頭り少札
製造追追ニ改引替ニ付金札入用ニ向ヒ
右頭り札持来ル分引替ニ事

第十八ヶ條

一 通為同為替会社金利所得割方
左ニ通

啓ヲ
金壱万両

所得

内

金三千三百三拾両余　國力積立備金

金三千三百三拾両余　為替会社諸経費
年代元利引拾年賦
仕拂

金三千三百三拾両余　起立分差加金改
出金者より
應割渡

但商社に未為替会社之備金へ
家初より差加居候此割合一ヶ五厘よ
ち賞賜の迄割渡事

第十九ヶ條

一横濱表に通商司為替会社并貿易商社
取建の事

第二十一ヶ條ノ除

一 為替手形發行ニ付貿易商社高人ヘ外國
賣込品代り金銀五拾萬以上ノ洋銀平
幷以上請取ノ為替會社ヘ正金差出手形
ト引替ノ規則ニ付中出張ノ人員差支ノ扱
等一ヶ年事

第二十一ヶ條ノ除

一 外國品買取代り金ヲ渡出ス為ノ日拡買ヲ
所持ノ正金為替會社ヘ差出會社ノ手形ト
引替右手形ヲ以外國人ヘ支渡荷物引取ス
等有此限ニ非ス事

第二十二ヶ條ノ除

一 洋銀引替ノ儀ニ付條約面ヘ通百枚ニ付

壱分銀三百十一（此金七拾七両三分）の割合ゟ出事

第二十三ヶ條

一 為替会社を形取ること定例休日ハ
外朝五ッ時ゟ夕七ッ時迄ニ付右刻限中
下出事

第二十四ヶ條

一 横浜新潟箱館ゟ開港場ハ東京持
神戸長崎等ゟ開港場ハ大坂持ニて遣ス
出張所設建前書の仕法ニ取扱事
其他為替掛ケ回収取扱の事

第二十五ヶ條

一 金札引換ニ付ては為替会社
為社組合等の心得ニ有ること
以前可申事

第二十六條

一 権威私情を以依怙の所業一切改革嘱
厚き
御趣意を解し政府猥を懐ク因循
政体の弊を改ハ仕法の弊相対の束縛
当中廃絶有之ハ第一革之高段必要
下付事

右箇條之趣堅守可申猶此後新利
を以古之箇條或ハ古改良廃省
一々此末に書加同様の為人の事

己九月

前書箇條之通規則一切極度変

お遣無之候以上

通商司
為替會社
弘頭取
三井三郎助
三井次郎右衛門名代
三井八之助
永田甚七
鴻田八郎右衛門名代
藤田東四郎

小野善助名代
行岡庄三郎
田中次郎右衛門名代
松本加三郎
小津清左衛門名代
大市彦蔵
下村正太郎名代
野口次郎三郎

同頭取並
川喜田久太夫名代
川喜田仲三郎

小林吟次郎義代

小林[illegible]之[illegible]

高崎長[illegible]

林[illegible]右[illegible]

[illegible]三郎[illegible]